

森をつくり、水を守り、資源を育てる

太陽が輝きを増し、生命力の溢れるこの季節、東通村では森・川・海の環境整備のため、様々な事業が展開されています。

近年、安定的な水産業の維持のため、種苗放流に加え、水産資源の源となる清らかなで栄養豊かな水を守る森林の育成や、水の循環環境の整備が重要視されています。東通村でも、主力産業である水産業の振興のため、自然環境の整備事業が行われています。

海に繋がる、森をつくる

その一つとして、6月20日(土)には、尻労共有林で東通村植樹祭が行われました。



オオヤマザクラを植える越善村長

植樹祭は東通村緑化推進委員会(越善靖夫会長)が毎年行っているもので、今年も各漁協組合長をはじめとする水産関係者や農林業関係者、ポースカウト東通第1団、東京・東北両電力をはじめとする村内事業者、ボランティアや住民の皆さん約180人が参加しました。

植樹祭では、記念のオオヤマザクラをはじめブナ、ヤマモミジなどの広葉樹を中心とした苗木550本を植樹。広葉樹には、森の土壌を肥やし、養分のある水を育む効果が期待されます。

こういった森をつくる事業により、栄養豊かで清らかな水系が保全されます。そして村では、豊かな川や海における稚魚などの種苗放流事業も支援し、水産資源の安定化・増大を図っています。

つくり育てる漁業

5月29日(金)には、老部川内水面漁業協同組合(坂本石蔵組合長)のサクラマスふ化場で、各漁協や県・村の関係者60名が出席する中、サクラマスの「幼魚(スモ

ルト)」の放流式が行われました。



ふ化場で飼育された幼魚を放流します

「幼魚」の放流事業は、昭和60年のサクラマスふ化場完成とともに毎年実施しているものです。

今回放流された「幼魚」は、平均尾又長13.5センチ、平均体重26.0グラム程度の幼魚1万尾です。平成25年8月中旬から10月上旬にかけて老部川に遡上した親魚と、池産系の3年間飼育した親魚から採卵し、ふ化後およそ1年6ヶ月間飼育されました。

また、6月20日(土)にも、老部川内水面保護水域においてサクラマスの放流式が行われ、ここでは、6万尾の「稚魚」が放流されました。

この放流地点の上流では、東通

村緑化推進委員会と東通村水産振興推進協議会(越善靖夫会長)の共催による植樹祭が行われ、森と水の保全も行われています。



上流では「稚魚」が放流されます

サクラマスの放流は沿岸海域での水揚げや河川回帰の増大に大きな期待がもてるもので、今年も稚魚と稚魚を合わせ、計296,755尾を村内の河川に放流する予定となっています。

このような種苗放流事業は、アワビやヒラメなど、村を代表する他の魚種でも行われています。

村は今後も、森・川・海の環境整備に繋がる対策や支援を続けながら、種苗放流などつくり育てる事業を推し進め、漁獲量の安定化・増大に努めていきます。